112 学年度第一学期ユーラシア財団（from Asia）国際講座
「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座（17）
テーマ：新しい共同体に向かって―その必要と意味―

中国文化大学 112 学年度ユーラシア財団（from Asia）国際講座の第 17 回目は、ユーラシア財団（from Asia）首席研究員の鄭俊坤先生による「新しい共同体に向かって―その必要と意味―」と題する講演であった。鄭先生は財団の活動を紹介し、その目的は世界の紛争がすべてなくなり、調和のとれた平和な世界のために教育で関係を広げていくことである、と述べた。

さて、個人は、共同体から離れることはできず、また、社会秩序は継続されなければならない。だから、今、未来のための想像力が求められており、その共同体については、過去と現在を知る必要がある。例えば、コロナ禍は今や地球上の誰もが恐怖や痛み、不安を感じている。また、ウクライナ戦争も世界共有の問題で、日本では国の支援とともに全国の自治体も多くの企業も国民もすべてがウクライナの痛みを共有している。さらに、IT 技術を通じた情報共有が為され、一瞬にして同時代全体で共有される。これらの事態は、人類が初めて地球規模で新しい価値観を共有する方向性を持ったことを意味する。

そこで、人間の活動について考えてみると、それは第 1 に所有、第 2 に関係である。第 1 の所有は、人間の要求や欲望を満たすために、また技術や文明の発展のために、自然科学と企業や国家が結び付き、その結果、活動は激化したが、人間は所有するだけでは生きられない存在でもある。第 2 の関係では、人間は社会的存在として共同体の中で生きるものであり、そこには秩序や調和が必要である。所有と関係の不均衡は人類に不幸を齎し、共同体の崩壊を招くものであり、世界では関係よりも所有が優先される傾向にある。

どうすれば両者の均衡が保てるだろうか。所有の発展は、もう誰にも止めることはできない。だとすれば関係をレベルアップさせる必要がある。そのためには個人の能力だけでは限界があり、家族や他の人々の協力が求められ、想像力が必要になる。これが想像の共同体である。

そこで我々は人間の持つ内面と制度という二つの壁にぶつかることになる。個人に焦点化した内面は偏見、先入観、自我形成といった要素で作られ、成長の過程で価値観が変化していく。その一方で共同体に焦点化した制度は、その維持に必要な一定のルールだが、次の段階へと進行させていく必要がある。

この問題を解決するには三つの視点が必要となる。それは時間と空間と人間である。ただし、「人間」は「じんかん」と読むべきであって、これらは時間と空間を共有する人々の集団を意味する共同体ということになる。

そこで先ず時間だが、この時間は瞬間を意味せず、無限に繋がり、連続す

る。次に空間。これは場所ではなく、自由な移動を意味し、国家という地理的なテリトリーではなく、広く多様な文化を共有することを意味する。そして人間だが、もともとの「human being」を近代の日本や韓国で翻訳した際に個人の意味の「人間（にんげん）」と訳してしまったのが実は誤解であって、本来の意味は「人間（じんかん）」すなわち社会共同体を意味していた。

そこで一つの問題を提起するが、世界で殺される人々の中で最も多数の死者は、実はテロや戦争、犯罪によるものよりも自殺が原因である。しかも自殺者数の統計よりも、専門家によれば潜在的に2倍から3倍多いということなので、80万人以上が自殺している世界では潜在的に240万人以上が毎年自殺しているということになる。これが現在の国家共同体の限界であり、その中で生きることを諦めた人々が多数存在したことになる。国家は平和に国民が生きるために存在するはずなのに、実は息苦しい共同体だということになるだろう。

それは何故なのか。それは共同体が変化していないからである。組織の維持に必要なものは変化である。近代の国民国家が成立してから、それらの主権国家は統一のため多様性や新しいものを拒むようになってしまった。しかし、変化しないと未来の希望は失われてしまい、古い国家体制のままで維持することは困難である。その変化のヒントは方向性であり、時間と空間を共有する人間集団としての国家とならなければならない。そこには共通のビジョン、共通の価値が求められ、我々は広い視野から世界を見なければならない。

イエール大学の歴史学の成果によれば、過去に最も覇権を持っていた国家は国土の広さや国民の数ではなく、包容力という寛容の精神を持って世界に関心を抱く多様性を生かした国家であって、自国中心主義に陥ると滅亡したという。新たなリーダー国家となる共同体に必要なのは多様性と包容力であり、全体を広い視野から見なければならない。講演中に見せた映像で示されたのも広い視野と多様な視点の必要性であった。

最後に21世紀を生きる人々は広く多様な視点を持つための訓練と練習の過程を学べば共同体が形成できる。国家を快適で生きやすい共同体とするためには地域で閉じ籠るべきではなく、それゆえに統合を意味するのではない。開かれた共同体であるためには多様性と包容力が必要である。その方向性のもとで内面と制度を「卒業」することで平和な社会を目指す。これは新しい価値観を得ることであり、そうすれば平和な共同体が形成できる。人類は前述の「壁」から「卒業」し、既存の価値観を脱却することで、未来を目指すことができるのである。

（ウェブサイト：https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php）

（日本語原文：齋藤正志　日文系教授）